新・改善改革探訪記

No.76　創意社・山口 幸正

空飛ぶ夢に生涯をかけた人がつくった神社

飛行神社

京都府八幡市八幡土井44

八幡市は大阪から京阪電車で30分。桂川，宇治川，木津川の三川が合流し淀川と名前を変えるあたり，それを見下ろす男山の麓に広がるまちである。男山山頂に京都を鎮護する石清水八幡宮があり，「八幡市」の地名はここからきている。閑静な住宅街の中に「飛行神社」がある。あまり神社らしく見えない神社で，正面にF104戦闘機のジェットエンジンと零式戦闘機のエンジンの展示があり，鳥居の向こうの神殿はギリシャ建築風で，饒速日命，航空殉難者諸神，薬祖神の三社が祀られている。創建は1915年（大正４年）。創建者は世界で最初に動力飛行機を飛ばした二宮忠八（1866―1936）という人である。彼がなぜこの神社を建てたのか。この神社の神々は何を守っているのか。その背景に，空を飛ぶという夢に挑戦し続けたこの人の一生があると，宮司の友田享さんは言う。

■空へのあこがれ

神殿の背後に二宮忠八資料館があり，忠八自筆の資料や自作の飛行機模型，晩年の書画などが展示されている。それらを一つひとつ示しながら，友田さんは語りはじめた。

友田享宮司

飛行神社の創建者，二宮忠八は1866年（慶応２年）愛媛県八幡浜市で生まれた。家は海産物を商う裕福な商家だったが，事業に失敗して没落。忠八は12歳で父を亡くし，伯父が営む薬問屋で丁稚奉公をはじめた。その傍らで薬学や理工学書を読み漁り，そのほかにも測量技師や写真館の手伝いなど，さまざまな仕事を経験した。

小さい頃から空を飛ぶものに魅かれていた。トビウオが海面を飛ぶ姿やモミジのタネが風に舞う様子を食い入るように見つめ

た。凧（たこ）が好きで，「忠八凧」と呼ばれるさまざまな形の，さまざまな工夫を凝らした凧をつくった。扇型の凧，風船凧という立体の凧，目玉がくるくる回るダルマ凧，13歳のときにつくった凧は，竹ヒゴでチラシを挟む仕掛けがあり，一定の高さにまで達したときに糸を引くと竹ヒゴが外れて空からチラシを撒くことができたという。

⇧二宮忠八（二十歳）

⇨飛行神社の正面

21歳で徴兵検査を受けた。身長が足りず甲種合格に届かなかったが，薬学の知識を生かして看護兵となり，香川県丸亀の陸軍歩兵十二連隊に入営した。

香川県まんのう町の樅の木峠で行われた大規模な演習で弁当をとっているとき，残飯をめがけて，カラスが翼をはばたかせることなくゆっくり滑空してくる様子を見て，羽根を動かさなくても飛べるのだと思ったという。

それがきっかけとなり1891年（明治24年）に「カラス型飛行器」をつくり上げた。脚部に３輪車を取り付け，聴診器のゴムをよじってその動力でプロペラを回したところ，10mほど滑走して30mほど飛んだといわれる。恐らくは世界の誰もがそれを達成していなかった時代に，固定翼による飛行原理を発見し実証したのである。

■飛行機製作の軍への上申と却下

次に玉虫に注目した。カブトムシやクワガタは硬い外羽根の下に柔らかい内羽根が折りたたまれているが，玉虫の内羽根は折りたたまれておらず，外羽根より一回り小さい。それで風を受け，飛ぶ方向を変える。その観察に基づいて1893年（明治26年），複葉型の「玉虫型飛行器」をつくった。上の翼で風を受け，下の翼で方向転換する。自分自身がこれに乗り込み，最初は自分の足で地面を蹴って，その後エンジンでプロペラを回して飛ぶという構想だった。

そのために，現在の50cc のバイクエンジンと同程度の馬力を持ったエンジンが必

要だった。購入するには，当時のお金で10万円かかる。忠八はこの後，民間企業に就職するのだが，そのときの初任給が月額15円だったから，10万円が途方もない大金だったことがわかる。

個人の力では如何ともなしがたい。そこで，忠八は，軍に軍用飛行機の製作を上申した。飛行機があれば馬で走らせるより早く伝令を伝えられる。空から敵地を偵察もできると訴えた。上申は1893年（明治26年）から５～６度に及んだが，日清戦争がようやく収束し，日露戦争に備えていた時代で，軍には余裕がなく，さらに，欧米人がまだ達成していない科学技術の成果を日本人に達成できるはずがないという先入観もあって，ことごとく却下された。

■八幡市への移住とライト兄弟成功の報

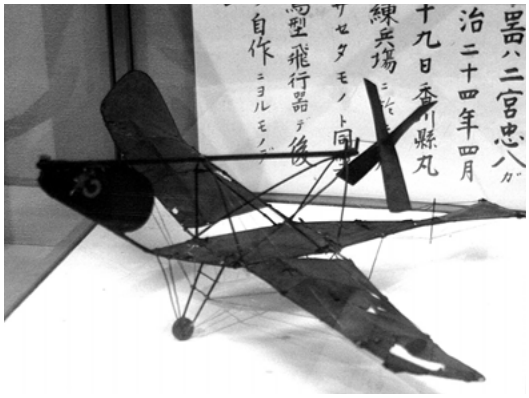
軍の支援が得られないのなら，自分でその資金をつくり出すしかなかった。1898年（明治31年），忠八は軍を除隊し，薬問屋の丁稚奉公時代の知識経験を活かして大阪製薬株式会社に入社した。大阪の道修町の薬問屋が共同出資して設立した会社で，最初は販売部に入ったが，その後，製造部門に移り，「健胃素」という胃薬や「舎利塩」という下剤を開発するなどして会社の発展に尽くし，やがて役員として経営の才を現し，最終的には経営の最高責任者にまでなった。

少し余裕ができた1900年（明治33年），34歳のとき，再び飛行機の製作に取り組むために，忠八は大阪北浜から，生まれ故郷の八幡浜と同じ名前を持つ京都府八幡市に移り住んだ。両翼合わせて12mの玉虫型飛行機の飛行実験をするには，木津川の広大な河川敷が好都合だったし，実験の成功のために石清水八幡宮の加護を求める気持ちもあったといわれる。

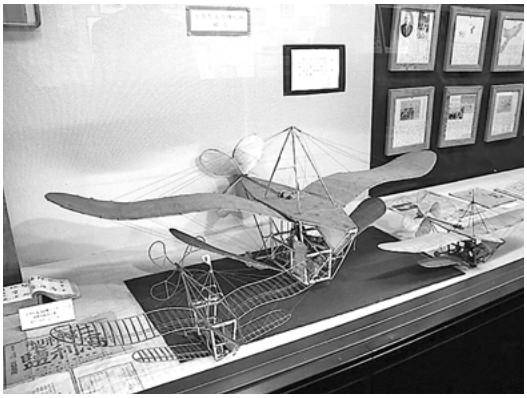
石清水八幡宮に参詣する道すがら１軒の米屋があり，そこで精米機のトントンという音がしていた。忠八はその店を精米機ごと買い取って，「二宮工作所」と名付けた。精米機のエンジンは飛行機のエンジンとして利用するつもりだった。

八幡市への移転から３年後の1903年（明治36年）12月18日，新聞が，アメリカのライト兄弟がオートバイエンジンで回すプロペラを推進力にした自作の飛行機で空を飛んだというニュースを報じた。

忠八の頭の中は真っ白になった。最初に空を飛ぶのは自分自身でなければならなかった。二番手では意味がない。ライト兄弟を真似たと言われるだけである。忠八はそう言って，何よりも大切にしていたはずの飛行機の模型を次々ハンマーで壊したという。「いまここにある模型は，飛行神社創建後に，忠八自身が再現したものなのです」と友田さんが言った。



カラス型飛行器


玉虫型飛行器

■長岡中将の詫び状と軍からの評価

ライト兄弟の初飛行の報道を受け，これからの戦争は，飛行機を持たないと勝つことはできないという見方が日本軍の中にも広がった。軍は飛行機の研究に着手することを決め，そのために帝国飛行協会をつくって，長岡外史陸軍中将がその責任者となった。奇しくも忠八の上申書を却下した，まさにその人物だった。

軍による飛行機の研究がすすむ中で，何人もの人が飛行実験中に墜落し命を落とした。その死が忠八には他人事とは思えなかった。自分自身が飛んでいたら恐らくは同じ運命をたどっていただろう。そう考えて忠八は，飛行機事故の犠牲者一人ひとりの名前を紙に書いて自宅の仏壇に供えていた。

たまたま白川義則中将ら，郷里の愛媛県出身の軍人たちと懇談したとき，話が飛行機事故に及び，忠八は自分の飛行機研究の話に触れた。それがきっかけで，軍ははじめて忠八の飛行機研究を知った。その研究が，人が乗って空を飛ぶ寸前の段階にまですすんでいたことがわかり，その詳細が雑誌に紹介された。やがて，同じ雑誌に，長岡外史中将から忠八に宛てた手紙が掲載された。かつて忠八の上申書を却下したことの不明と，そのことさえ忘れていたことを詫びる内容で，「貴兄のせっかくの大発明を台無しにしたのは小生である」と率直に認めていた。

ライト兄弟の飛行の12年前に，飛行原理を発見しゴム動力の飛行機を飛ばした日本人がいたという話題は，日本人の自尊心をかき立てた。「カラス型飛行器」の着想のきっかけとなったまんのう町の樅の木峠には顕彰碑が建てられ，帝国飛行協会から忠八に感謝状と金杯が，国からは勲六等瑞宝章が贈られた。そして，この話は国定教科書にも掲載されて，ほとんどの国民が知るところとなった。

三社を祀る神殿

■飛行神社の創建

忠八は飛行機事故の犠牲者を悼むために，自宅の中に神社を建てたいと考えていた。当時は個人が自由に神社を建てることはできなかったが，長岡外史中将と白川義則中将の尽力で，八幡市の自宅に「飛行神社」の創建が認められることとなり，大阪府交野市の磐船（いわふね）神社から饒速日命（にぎはやひのみこと）を分霊して祀ることとなった。1915年（大正４年），このとき忠八49歳。饒速日命は，天上から天磐船（あめのいわふね）に乗って地上に降り立ったとされる日本書記に出てくる神で，その意味で飛行の神とされたのである。

併せて，空の安全を守る神として，航空機事故の殉難者を祀っている。1959年からは世界中の航空機事故犠牲者を合祀し，現在の合祀者は22万柱に及ぶ。

もうひとつの祭神，薬祖神は，忠八が大阪製薬の役員を勤め，同じ役員の中に武田，塩野義，田辺など，現在の大手製薬会社の創始者も含まれていたことから，加わったものである。

■空の便りの叶う飛行機

二宮忠八の名前は，戦前には教科書にも載るほど多くの人たちに知られていたが，飛行神社の参拝者は，当初は軍関係者だけだった。戦後は米軍の占領政策の下で，飛行機の製造も研究開発も禁じられ，教科書への記載もなくなったために，二宮忠八と飛行神社を知る人は少なくなった。

しかし，航空運輸関係者と航空機メーカーは，日本の空へ扉を開いた二宮忠八への敬意を忘れることはなかった。新しい航空機，ロケット，人工衛星が開発される度にいまもここを訪れ，安全と飛行の成功を祈願し続けている。

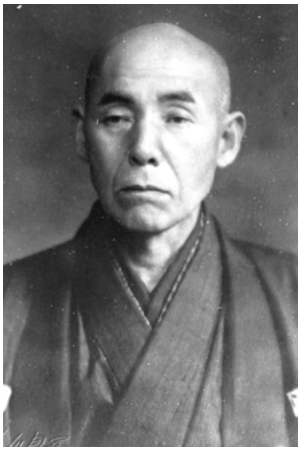
飛行神社への参拝客は，近年になって急速に増えた。飛行機に乗る人が増え，その安全を願って，お守りやお札を求める人が増えたためである。パイロットや客室乗務員試験への合格祈願や，一般の受験の合格祈願の人も多い。台湾など外国人観光客の参拝も多く，最近は外国人だけで年間7000～8000人。日本人を含めると，年間参拝客はその10倍程度と見られる。

「二宮忠八は自分自身が空を飛ぶという夢を実現できなかった。その意味では失意の人だったのでしょうか？」と，友田さん

に尋ねてみた。「いや，そんなことはないと思います」と友田さんは答えた。

夢は実現できなかったが，軍に認められ，国はさらに忠八の業績を国定教科書に載せてまで国威発揚に利用しようとした。しかし，二宮忠八の偉大さは，単にそれに乗ったのではなく，どんなことがあっても空への夢を諦めなかったことにある。家が没落しても，丁稚奉公しながらでも，徴兵検査で甲種合格を果たせなくても，軍への上申が何度も却下されても，薬業の仕事と二足のわらじを履きながらも，最後まで諦めることはなかった。いま年間何万人もの人がこの神社を訪れるのは，この人の一途さと強靭な精神力に引き寄せられるからだろうという。

晩年の忠八は「幡山」と号して，書を書き，画を描いて芸術三昧の生活を過ごした。その作品の中にこういう書がある。


二宮忠八（晩年）

「翼なき身をいまは憂えず，空の便りの叶う飛行機」。

飛行機が無事に空を飛んでくれていれば，自分には思い残すことはないというのである。

取材・執筆　山口 幸正（やまぐち ゆきまさ）

《プロフィール》
外資系食品製造業人事部勤務の後，産業教材出版業勤務。全国提案実績調査を担当し，改善提案教育誌を創刊。1985年に独立し創意社を設立，『絵で見る創意くふう事典』『提案制度の現状と今後の動向』『提案力を10倍アップする発想法演習』『提案審査表彰基準集』『改善審査表彰基準集』『オフィス改善事例集』などの独自教材を編集出版。40年にわたって企業・団体の改善活動を取材。現在はフリーライター。
●創意社ホームページ http://www.souisha.com 「絵で見る創意くふう事典」をネット公開中